

誕生地遺跡発掘調査概要Ⅲ

2001. 3

千早赤阪村教育委員会

『誕生地遺跡発掘調査概要Ⅲ』 正誤表

頁	行	正	誤
例言	17	佐久間貴士	佐久間貴史

誕生地遺跡発掘調査概要Ⅲ

2001. 3

千早赤阪村教育委員会

はしがき

金剛山と「太平記」で広く知られている大阪府下で唯一の村である千早赤阪村には、楠木正成に縁のある伝承地や地名が多く残っています。

今回、楠公誕生地遺跡で発掘調査を行ったのも、そのような伝承地の1つである「楠公産湯の井戸」の整備工事に伴うものです。本報告書は、その楠公誕生地遺跡で行われた公共事業に伴う発掘調査の成果について報告するものです。

調査の実施及び遺物整理にあたっては、多くの方々のご理解・ご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも本村の文化財行政にご理解・ご協力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

平成13年3月

千早赤阪村教育委員会

教育長 大西清和

例 言

- 1 本書は、平成12年度に行われた楠公誕生地遺跡内における公共事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 調査は、千早赤阪村教育委員会指導課 和泉大樹 を担当者として、平成12年7月10日に着手し、平成12年7月31日をもって終了した。引き続き遺物整理を行い、平成13年3月31日に完了した。ただし、本書には作成等の都合上、平成12年1月11日から平成12年1月14日までの期間に行なった調査報告についても掲載した。
- 3 本書の執筆・編集は、和泉が行った。なお、「調査地周辺の歴史的環境」については周藤光代と和泉が執筆し、和泉がまとめた。
- 4 調査の実施及び本書の作成にあたっては次の方々の参加を得た。(順不同・敬称略)
西川正彦・岩子苑子・谷口夫抄子・福田夏子・周藤光代・前川篤史
- 5 現地調査及び遺物整理において下記の機関・方々にご協力頂きました。記して感謝の意を表します。(順不同・敬称略)
大阪府教育委員会・千早赤阪村事業部農林商工課・千早赤阪村事業部下水道課
千早赤阪村立郷土資料館・千早赤阪村教育委員会管理課
佐久間貴史・栗田薰・西山昌孝
- 6 掲図の方向は国土座標に基づく座標北を示し、標高はT.Pで表示した。
- 7 平成12年11月付けで桐山遺跡の範囲は拡大しているが、第2図周辺遺跡分布図には拡大前のものを用いている。

目 次

はしがき

例言

目次

1. はじめに

(1) はじめに 1

(2) 調査地周辺の歴史的環境 1

2. 調査成果の概要

(1) 楠公誕生地遺跡 NT - 99 4

(2) 楠公誕生地遺跡 NT - 00 11

付記 千早赤阪村の消滅した古墳 13

挿図・写真目次

第1図 千早赤阪村位置図 1

第2図 周辺遺跡分布図 3

第3図 調査地位置図 5

第4図 調査区遺構平面図・土層断面図 6

第5図 遺構断面図 7

第6図 SE 01・SP 07出土遺物実測図 9

第7図 耕作土出土・調査区周辺採集遺物実測図 10

第8図 出土遺物実測図 12

写真1 NT - 00検出遺構 11

図 版 目 次

図版1 調査区近景・全景

図版2 SE 01全景・土層堆積状況・遺物出土状況

図版3 出土遺物

1. はじめに

(1) はじめに

千早赤阪村の北部に位置する楠公誕生地遺跡は、平成3・4年にかけて、くすのきホール建設予定地を発掘調査した結果、14世紀の二重の堀を巡らせる建物跡が検出されたが、規模的にも時期的にも楠木氏との関連が考えられた。本報告書でこれから報告する2件の発掘調査も、もちろん重要遺構等の有無の確認、埋蔵文化財の記録保存を一番の目的としながら、先述した事項を問題意識として念頭に置き事前調査を行った。以下、それらの発掘調査の概要について年月日の順に記す。

(2) 調査地周辺の歴史的環境

千早赤阪村は大阪府の南東部に位置し、北・西・南側を河南町・富田林市・河内長野市と、東側を南北に連なる金剛山地を境界に奈良県御所市・五條市と接する。調査地は本村の北側、字水分に所在し、金剛山地から延びる丘陵上に立地する。

旧石器・縄文・弥生時代の生活痕跡はほとんど確認されていないが、今回調査を行った楠公誕生地遺跡や大廻遺跡などからは縄文時代後期の磨消縄文土器片や石器類が出土している。この楠公誕生地遺跡から約2.0km北側に位置する河南町神山遺跡からは早期押型文土器片・前期条痕文土器片・後期磨消縄文土器片などが、またさらに北側の寛弘寺古墳群では落とし穴と考えられる遺構が検出されており、今後本村においても縄文時代の遺構が確認される可能性は十分にある。

調査地周辺の古墳時代の遺跡は、御旅所古墳・御旅所北古墳・御旅所遺跡・森屋古墳群・浄心寺山古墳などがある。御旅所古墳・御旅所北古墳は昭和56・57年に調査されており、御旅所北古墳は周溝を伴う円墳で、繩掛突起をもつ組合式家型石棺が2基検出されている。御旅所遺跡からは高杯や瓶などの韓式系土器が出土している。森屋古墳群は昭和20年代の道路設置の際に消滅した1号墳と2号墳の他に4基の古墳が、計6基の古墳があったとされているが詳細は不明である。なお、1号墳・2号墳の周辺からは、須恵器の高杯や脚付有蓋子持壺などが採集されている。浄心寺山古墳では須恵器の提瓶や杯蓋が採集されており、石室の存在も伝えられている。

飛鳥・奈良時代の遺跡は、史跡赤阪城跡・森屋西遺跡・御旅所遺跡などがある。史跡赤阪城跡で



第1図 千早赤阪村位置図

は平成9年から12年にかけて丘陵の裾部を調査した際に、飛鳥I・IIや平城段階の土器が出土している。さらに北側の森屋西遺跡内では、詳細については不明であるが、みかん山開墾の際に藏骨器と考えられる有蓋の須恵器が採集されている。御旅所遺跡では奈良時代の掘立柱建物や溝などが検出されている。

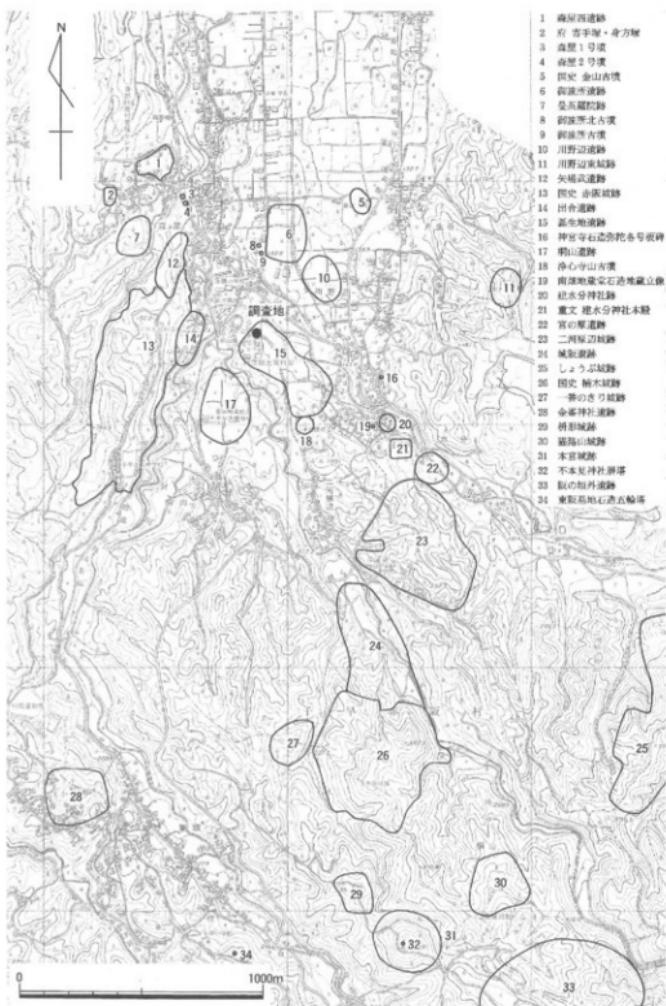
本村は南北朝動乱の舞台の1つとなった地であり、多くの中世の遺跡がある。山城跡は、昭和9年に国史跡に指定されている千早城跡・楠木城跡（上赤坂城跡）・赤阪城跡（下赤坂城跡）をはじめ、二河原辺城跡・本宮城跡・しょうぶ城跡・拵形城跡・猫路山城跡など多数認められる。また、館跡としては今回の調査地である楠公誕生地遺跡・桐山遺跡などがある。楠公誕生地遺跡は、平成3・4年にかけて行われた調査で、二重の堀を持つ14世紀代の館跡を検出し、多くの中世遺物が出土している。また、付近には「楠公産湯の井戸」の伝承地が残る。桐山遺跡は建武の中興以降の楠木邸跡と伝えられており、「花屋敷」・「古屋敷」・「光明院跡」などの小字名が残る。他にも本村には「矢場武」・「甲取」・「城ヶ越」など城跡と関連のある小字名が残る。

城跡や館跡・伝承地の他にも多くの中世の文化財が残る。森屋惣墓には「寄手塚」・「身方塚」の五輪塔があり、いずれも花崗岩製で各々総高182.0cm・137.7cmを測る。前者は河南町寛弘寺神山墓地の正和四年の銘のある五輪塔とほぼ同じ時期のものであると考えられており、村内最古のものである。後者は大和系の製作手法の特徴である反花基壇上に塔を備える。南北朝時代の所産である。

以上のように、調査地の周辺には、主に古墳時代と中世に属する遺跡・文化財が多く分布する。

【参考文献】

- 和泉大樹 2000 「千早赤阪村の山城 上赤坂城跡探査遺物」『摂河泉』第30号
大阪府教育委員会 1997 『大阪府文化財地名表』
尾谷雅彦 1996 「御旅所遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究VI』
千早赤阪村教育委員会 1983 『御旅所・御旅所北古墳調査報告書』
千早赤阪村文化財調査 報告書第1冊』
千早赤阪村教育委員会 1995 『誕生地遺跡発掘調査概要Ⅰ』
千早赤阪村教育委員会 2000 『国史跡 赤阪城跡 千早赤阪村埋蔵文化財調査報告書 第2輯』
千早赤阪村村史編さん委員会編 1980 『千早赤阪村誌』 千早赤阪村役場
福澤邦夫 1994 『千早赤阪の石造文化財 I 千早赤阪村文化財調査報告書 第4集』
千早赤阪村教育委員会



第2図 周辺遺跡分布図

2. 調査成果の概要

(1) 楠公誕生地遺跡 NT-99

(調査の契機)

調査地は楠公誕生地遺跡の北端に位置する。楠木正成の伝承地である「楠公産湯の井戸」の散策道の整備に伴う事前調査として行った。対象地は水田の畦にあたる箇所であり、高低や屈曲が著しく、全体として細長い事業地であった。事業面積は187.47m²を測るが、4箇所の先行トレンチを設定し遺構を確認したトレンチの箇所に調査区を設けた。調査面積は21.25m²で、平成12年1月11日から14日の4日間で発掘調査を行った。なお、遺跡番号はNT-99と記号化した。以下、概要について記す。

(層順)

現地表面下15~35cmは耕作土が覆うが、調査区の西側は水田として、東側は畑地として異なる用途で利用されていたため、耕作土の堆積は東西で違いが見られた。これらの直下で地山を確認した。

(検出遺構)

東西に約2.5m、南北に約8.5mと南北方向に長い長方形の矮小な調査区であるが、柱穴（S Pと表記）や井戸（S Eと表記）など計10基の遺構を検出した。なお、これらはすべて地山面で検出した。

S P 01

調査区の南側、S E 01のすぐ北側で検出した。やや角をもつがほぼ円形の平面プランを呈する。断面は最深部で深さ約8.0cmを測る。遺物は出土していない。

S P 02

S P 01と03の間で検出した。やや南北方向に長いが、直径約40.0cmのほぼ円形を呈する。掘り方は最深部で約20.0cmを測る。埋土は茶褐色粘質土1層である。遺物は確認していない。

S P 03

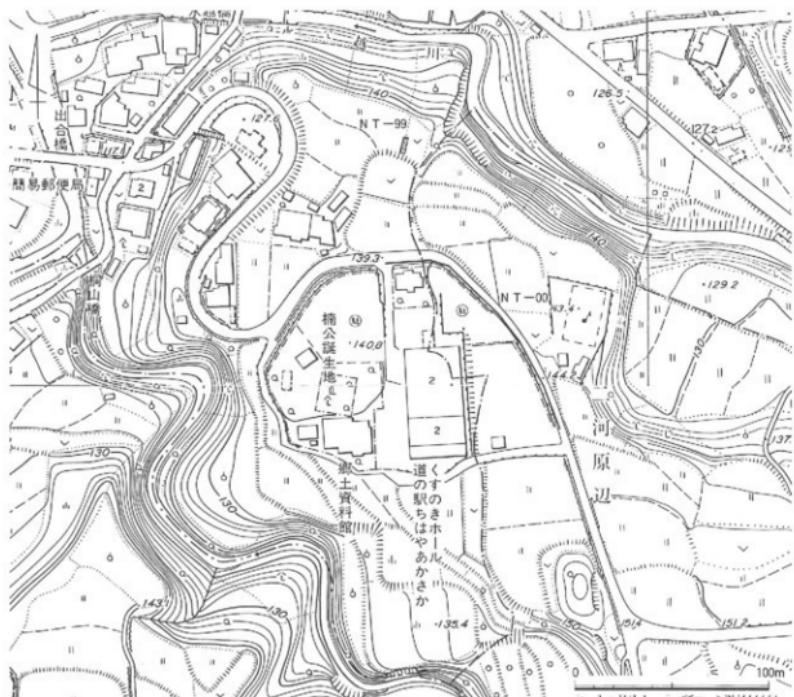
遺構は西側半分のみ確認した。やや角をもち四角形に近い平面形を呈する。南北に約85.0cmを測る。掘り方にもやや角がありS P 01のように曲線的な皿形を呈していない。最深部で約20.0cmを測る。遺物は出土していない。

S P 04

調査区の一番西側で検出した。遺構は概して梢円形を呈するが南側の遺構輪郭ラインがやや北側へ突出し、窪んだ様を呈する。断面は皿形を呈し、最深部で約8.0cmを測る。埋土は茶褐色の粘質土である。遺物は出土していない。

S P 05

遺構は東端が現代攪乱によって切られる。直径約20.0cmのほぼ円形の平面プランを呈する。深さは約10.0cmを測る。遺物は確認していない。



第3図 調査地位置図

S P06

S P03の北側で検出した。S P03と類似する平面プランを呈するが掘り方はそれよりも浅く約5.0cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の單一土層である。遺物は出土していない。

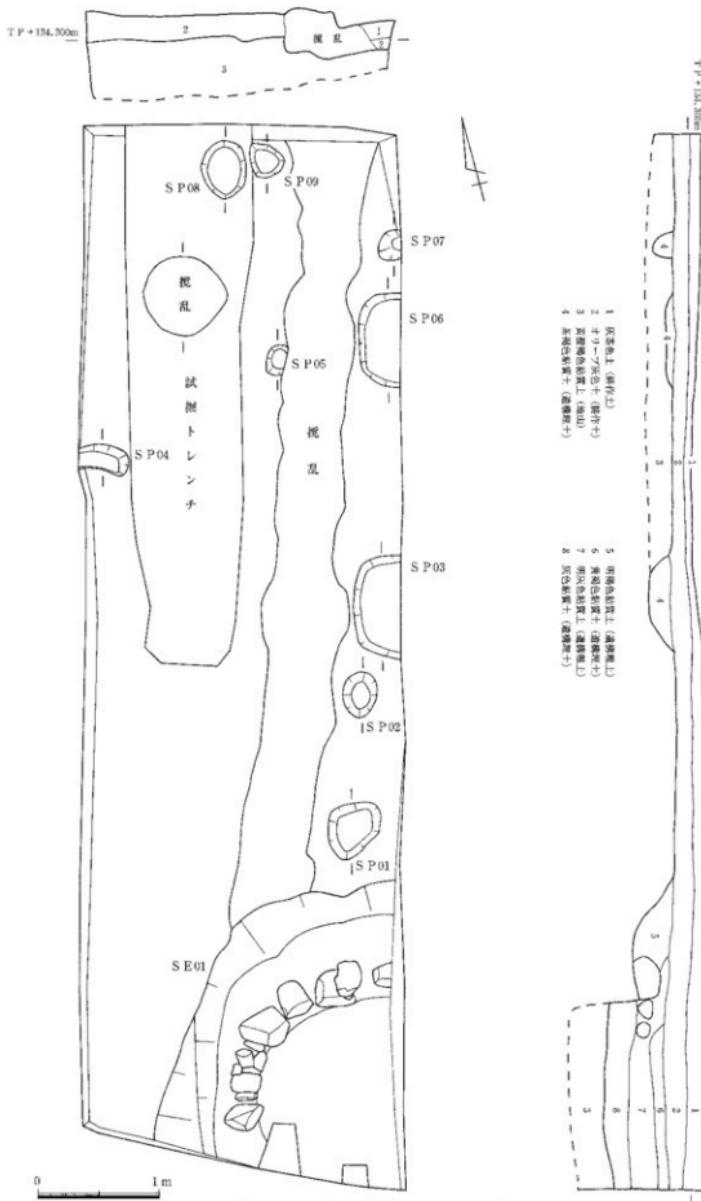
S P07

S P06のすぐ北側で検出した。遺構は西側半分のみ確認した。直径約25.0cmのほぼ円形の平面形を呈する。埋土は茶褐色粘質土で「寛永通宝」が出土した。

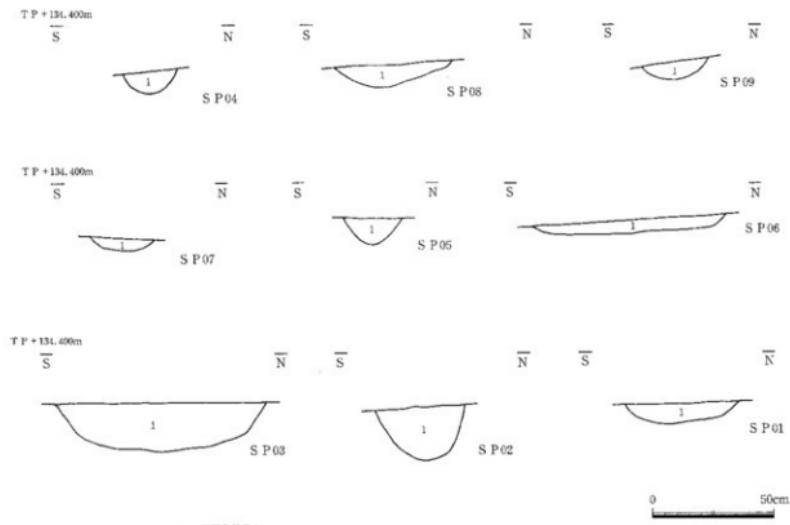
S P08

試掘時に検出した遺構である。南北方向にやや長いが直径約45.0cmのほぼ円形を呈する。掘り方は最深部で約10.0cmである。遺物は出土していない。

発生地遺跡発掘調査概要Ⅲ



第4図 調査区遺構平面図・土層断面図



第5図 遺構断面図

S P09

S P08のすぐ東側で検出した。北西隅でやや角をもつ平面プランを呈する。断面は皿状をなし、最深部で約7.0cmを測る。遺物は出土していない。

S E01

調査区の南東隅で検出した。遺構は全体の約3分の1を確認したにとどまり、残りの部分は調査区の外側へと続く。井戸中央部の掘り方の平面プランは直径約1.8mの円形を呈し、周間に1~2段の石組みを伴う。埋土は下層から灰色粘質土・明灰色粘質土・黄褐色粘質土の順に堆積する。深さは検出面から50.0cmを測る。埋土からは投棄されたと考えられる土師質羽釜・伊万里・備前・瓦質火鉢・キセルなどが出土している。この井戸の埋没年代は出土遺物より18世紀を考えたいが、1点中世に遡る可能性のある羽釜片が含まれており、機能を有していた年代はその時期まで遡りうる可能性がある。

(出土遺物)

調査区からは、伊万里・唐津・備前・漆焼・瓦質火鉢など近世に属する遺物を中心に遺物コンテナ約1箱分の遺物が出土した。これらの遺物は大半がS E01から出土した。以下、出土遺物について、

造構出土分、耕作土・周辺採集遺物の順に記す。

(S E01出土遺物)

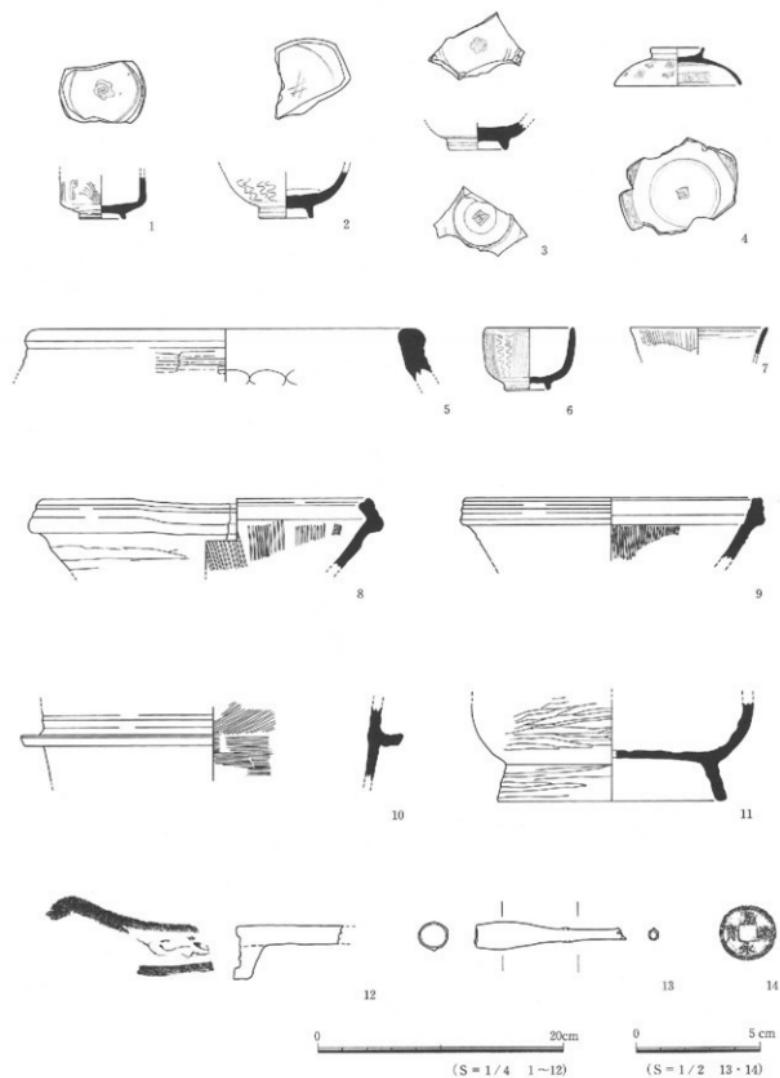
14～4・6・7は伊万里である。1は筒茶碗で高台はわずかに外側へ開き、高台径は3.5cmを測る。見込にはコンニャク印判によって崩れた五弁花文を描く。2は碗である。外面にはよろけ縞文が描かれる。高台径は4.2cmである。3も碗である。見込には界線が2条巡らされ、コンニャク印判による五弁花文が描かれる。高台部にも界線が2条描かれる。高台は1・2に比してしっかりと作られている。高台径は4.6cmを測る。4は蓋である。口縁部内面には菱つなぎ文が施され、見込・天井部に2条、つまみ部に1条の界線が描かれる。外面には桜桃が描かれる。径10.2cm、器高3.1cm、つまみ部径4.2cmを測る。他に比して文様は丁寧に描かれている。6は杯である。外面にはよろけ縞文が描かれる。口径7.0cm、器高5.2cm、高台径3.4cmを測る。7は碗である。他に比して器壁が薄く、口縁部はやや外側へ開くプロポーションを呈する。他に比べて新しい時期のものであろう。5は土師質の壺である。復元口径30.0cmを測る。外面に平行タタキ目を施し、内面は刷毛目がナデ消され指サエの痕跡が残る。8・9は備前の描鉢である。8は9に比して口縁部の屈曲の度合いが強い。10は土師質の羽釜である。内面鉢下に横方向に刷毛目がそれより上位には斜方向に刷毛目が施される。外面鉢下には煤の付着が認められる。11は瓦賀の火鉢の底部である。高台高3.0cm、高台径18.5cmを測る。外面にはミガキ調整が施され、内面はナデ調整が行われるが、底面は特に調整は行わず粗雑である。12は軒平瓦、13は銅製のキセルの吸口である。

(S P 07出土遺物)

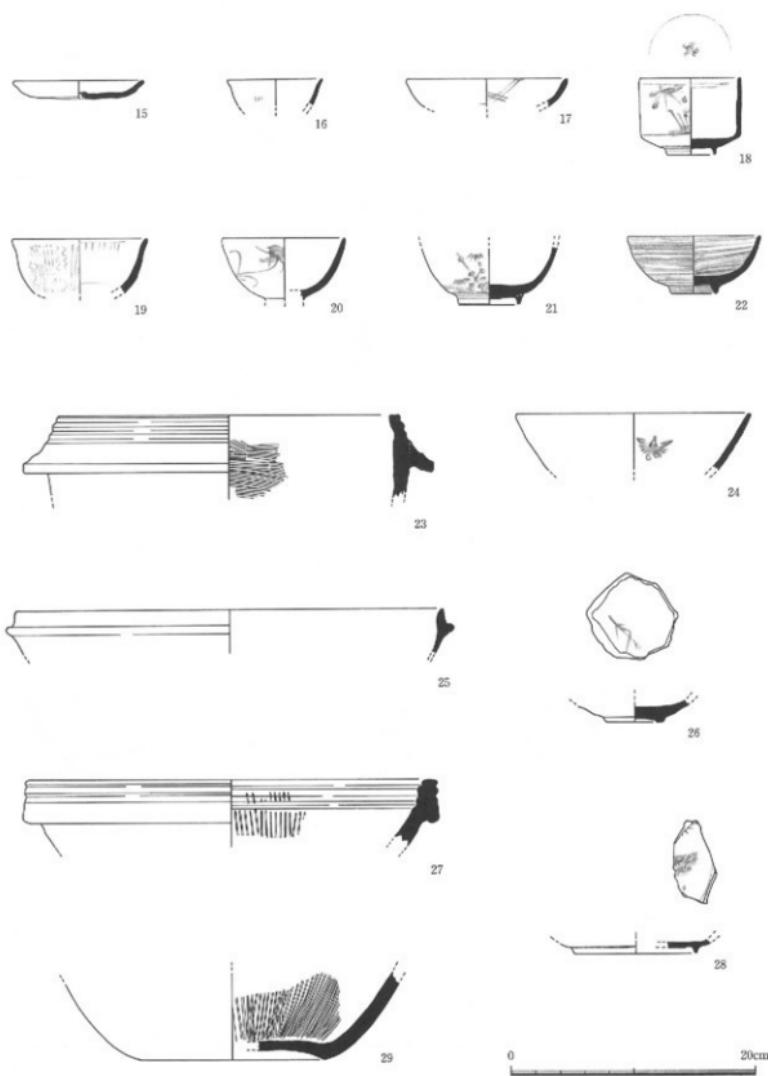
14の「寛永通宝」が1枚出土した。

(耕作土及び付近採集遺物)

15は瓦器の皿である。復元口径は10.5cm、器高1.5cmである。16は產地不明の碗である。復元口径は7.8cmを測る。器壁は他に比して薄手で口縁部はやや外側へ開く。17～21・24・28は伊万里である。17・24・28は皿である。17は復元口径12.9cm、24は19.0cmを測る。28は底部で高台径は9.8cmを測る。18は筒茶碗で口縁部内面に界線が2条巡り、見込には1条の界線と印判五弁花が描かれる。外面には竹・葦文が描かれる。復元口径は8.2cmを測る。19～21は碗である。19は外面によろけ縞文を描く。復元口径は11.0cmである。口縁はやや外側へ開く。20は復元口径9.8cmを測る。外面には草花文が描かれる。21は高台が残存する。高台径は4.8cmで高台部外面には2条の界線が描かれる。外面には葦文が描かれる。22・26は唐津である。前者は高台径4.5cm、後者は4.6cmを測る。なお、後者には胎土目痕が確認できる。23は土師質の羽釜で復元口径26.6cmを測る。内面には刷毛目調整が顕著に残る。中世まで遡る可能性もある。25は復元口径35.0cmの土師質の羽釜である。鉢下には煤の付着が確認できる。27・29は備前の描鉢である。27は口縁部片で復元口径33.0cmを測る。29は底部でややあげ底となる。底径15.0cmを測る。



第6図 SE01・SP07出土遺物実測図



第7図 耕作土出土・調査区周辺採集遺物実測図

(まとめ)

以上、NT-99の調査成果の概要を記した。極めて狭い調査区であったにもかかわらず、多くの生活痕跡を確認した。出土遺物から概して18世紀という時期を与えることができようが、中世に遡りうる遺物も若干出土しており、中世においてもこの地の利用があったと考えられる。このことは、調査地のすぐ南側で14世紀代の大規模な二重の堀を巡らせる建物跡が検出されていることからも、妥当な見解と言えるであろう。

(2) 楠公誕生地遺跡 NT-00

(調査の契機)

調査地は公共下水道に伴う事前調査である。該当地のすぐ西側では、平成3・4年に行われた発掘調査で二重の堀を巡らせる建物跡が検出されており、その範囲などを確認するうえでも重要であると考えられたため、本村では下水道工事に伴うものは工事立会で対処することが多いが、事前に発掘調査を行った。調査面積は、135.0m²で、調査は平成12年7月10日から31日までの期間で行った。なお、遺跡番号はNT-00と記号化した。以下、概要について記す。

(概要)

掘削深度が約1.5mであったため、それを基本として掘り下げた。調査区北側では地山を確認することができなかったが、遺物包含層より瓦器や土器などの小破片が出土した。遺構は検出できなかつた。調査区の南側ではアスファルト直下ですぐに地山を確認したが、地山はすでにある程度の削平を受けており、検出した遺構についてもすでに削平を受けた状態での検出となつた。遺物については認められなかつた。

(出土遺物)

調査区の北側の遺物包含層より若干の遺物が出土したが、ほとんどが小破片であり図化可能なものはほとんどない。土師質の壺の底部や瓦器の皿・瓦質の壺・「洪武通宝」などが出土した。

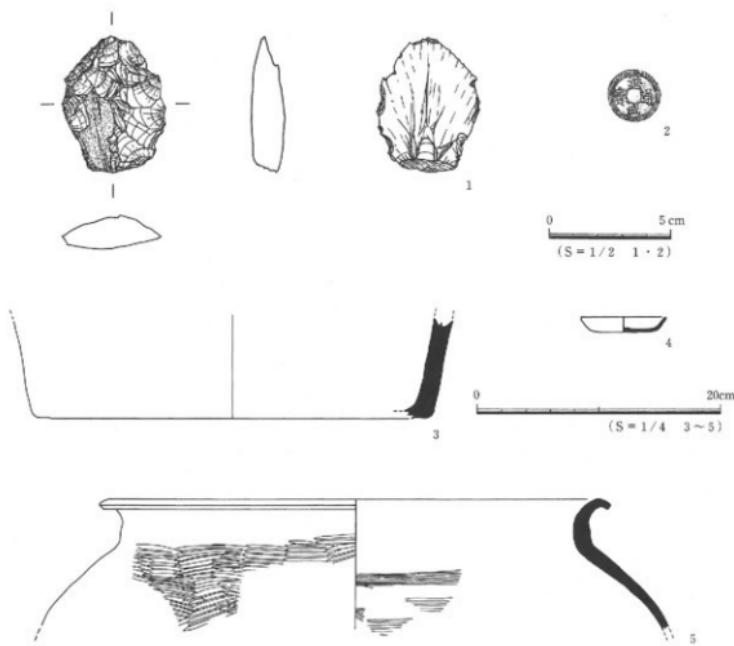
(まとめ)

以上、NT-00の概要について記した。

過去に調査を行った二重の堀を巡らせる建物跡の北側では丘陵の地形をそのまま反映して地山は落ちていき、東側はすでに地山はある程度の削平を受けており、遺構の残存の可能は極めて低いという成果を得ることができた。



写真1 NT-00検出遺構



第8図 出土遺物実測図

付 記

千早赤阪村の消滅した古墳

和 泉 大 樹

はじめに

大阪府の南東部に位置する千早赤阪村の北部には、現在はその痕跡すら留めてはいないが、数基の古墳が存在した。そのことは、古老の話や『千早赤阪村誌』などから伺うことができる。また、何よりの証拠の1つとなりうる採集遺物からもその痕跡を推測することが可能である。以下、遺物が採集された地点とその遺物を紹介し、遺憾ながら、現在では見る影もないが、その地に古墳があったであろうことを文章として記しておきたい。

採集地点とその遺物

すでに『千早赤阪村誌』(以下、「村誌」と記載)に紹介されているものが大半はあるが、採集遺物についての明瞭な実測図や詳細な説明はない。そこでここではそれを補うべく遺物に関しての説明とまだ紹介されていない地点と採集遺物について報告する。

(1) 森屋1号墳 (第1図1)

金剛山地から北側へ延びる丘陵の1つに位置する。この丘陵の北側には寛弘寺古墳群や神山丑神遺跡・西大寺山古墳群などが分布する。古墳はこの丘陵の東側斜面、金剛山を源として北上し、石川へと合流する千早川のすぐ西側にあった。「村誌」によれば、昭和29年に完成した森屋バイパス(現国道309号線)の設置工事の際に破壊された古墳で、円墳であったようである。また、神戸商船大学名誉教授の北野耕平氏も何分古い話で「・・・竹藪の中に石室の蓋石と思われるものを2つ見た。・・・」と語っていただいたとも記されている。

採集遺物 (第2図1・2)

この古墳のあった地からは2点の須恵器が採集されている。

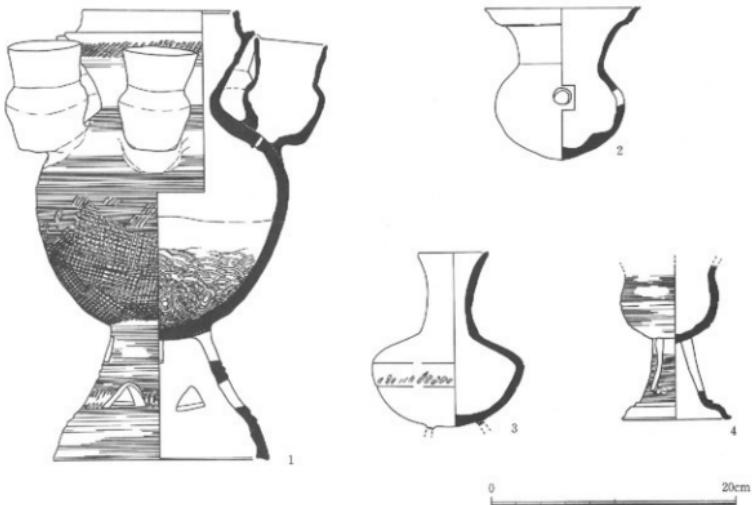
1は脚付有蓋子持壺である。従来、蓋を伴うものであろうが、蓋については採集されたのかどうか明確でない。口径5.8cm・頸基部径5.0cm・体部最大径6.6cm・器高8.4cm(子壺の1つの数値)を測る子壺が5つ伴う。なお、このうちの1つは欠損していたために復元を行った。その他の部分は欠損せずに形をとどめる。頸基部は径9.8cmを測り、口頸部は外側へとのび、受部とたちあがりを伴う。体部は中程で最大径20.7cmを測る。脚部は外方へ広がりながらのび、据付近でやや内側へすぼまる。



第1図 古墳・遺物採集地分布図

11.0cmを測る脚部には、上段に3方向に長方形のスカシが、下段に4方向に三角形のスカシが配される。これらのスカシは上下段で重なり合わない。調整・文様については、口頸部には刺突文が施される。体部はカキ目が施されるが、下部には格子状タタキ目が施される。また、体部内面下部には同心円文タタキが認められる。脚部にはカキ目が施されるが、4方向に三角形のスカシが施される段には波状文が粗雑に施される。

2は頸である。口頸部は外反して外方へとのび、いったん段を形成してまた外方へとのびる。口縁端部では端部の中央がややくぼむ。体部は最大径が中位よりもやや上位に位置する球形で、底部は丸くついている。また、体部には径1.4cmの円孔が上方から下方へと穿たれる。内外面ともに回転ナデ調整を施す。この頸の採集地点について、「村誌」には、森屋1号墳の付近から採集されたと言われているが明確ではないと記されている。



第2図 消滅古墳探集遺物実測図（1）

(2) 森屋2号墳（第1図2）

1号墳の南側に位置する。1号墳と同様に円墳と考えられており、やはり道路設置の際に消滅したようである。採集された遺物の有無などについては明確でない。

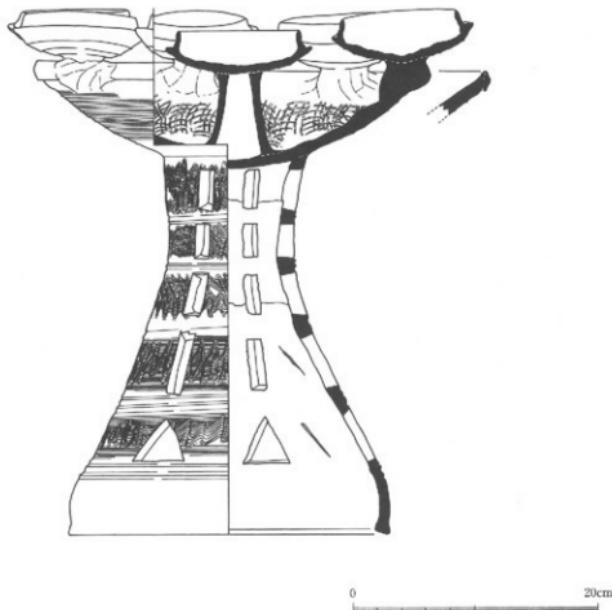
(3) 森屋3号墳（第1図3）

上記の2号墳から南南西の方向に位置する。現在の状況から述べると、1・2号墳に比してより丘陵側に、すなわち、立地する標高をやや高くする。『村誌』にはやはり円墳と推定されている。みかん山開墾時に消滅したようである。2点の遺物が採集されている。

採集遺物（第2図3・4）

みかん山開墾時に遺物が採集されている。

3は台付長頸壺である。口頸部はなだらかに外反して外側へ開き、口縁端部は丸くおさめる。肩がやや張るプロボーションを呈する体部は、中位よりやや上位に最大径を測る。2本の沈線の間に刺突文を施す。体部下位から底部にかけては回転ヘラケズリの痕跡が認められるが、ナデ調整を施しているためそれほど顕著ではない。高台の痕跡は確認できるが、ほとんどを欠損する。ただし、この台付



第3図 消滅古墳采集遺物実測図（2）

長頸壺については、「村誌」には3号墳採集と紹介されているが、土器の底面には1号墳という注記がされており、地点については判然としない。

4は台付壺である。体部下半から下位が残存する。体部は中位でいったんくびれて外側へ開くプロポーションを呈する。脚部には長方形のスカシが3方向に穿たれる。体部・脚部ともにカキ目調整が施される。体部下半には沈線が2本施されている。脚部はやや開き気味にのび、いったん段をなして丸味をもって外反する。端部は丸くおさまる。

（4）森屋4号墳 （第1図4）

3号墳のすぐ南側に位置していたと聞いたと『村誌』に記載されているように『村誌』掲載の段階において、すでに不明確であったようである。

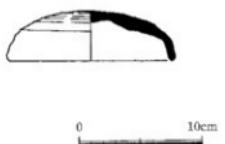
(5) 子持器台採集地点 (第1図7)

先の1~4号よりも南側に位置する。この付近の丘陵を開墾していた際に子持器台が1点採集されている。

採集遺物 (第3図)

2000年1月に村教育委員会へ寄贈していただいたものである。

台部は口径32.3cmを、台高7.7cmを測り、底部はあまり深い感じはない。この台部には中央に1つ、その周囲には7つの杯が配される。なお、台部の3分の1は欠損しているため、これらのうちの3個体は完全に復元を行った。外面は回転ヘラケズリの後カキ目を、内面には同心円文のタキを施す。口縁部は回転ナデ調整を行う。脚部は外方へ広がりながらのび、据付近でやや内側にすぼまるプロボーションを呈する。脚部は沈線によって6段に区分され、最下段を除く各段にスカシが穿たれる。スカシは最上段から4段目までは4方向に長方形で、5段目は4方向に三角形のスカシを直線的に配する。なお、2段目のスカシは長方形のスカシの中で最も小さい。4段目と5段目には、各々、スカシとスカシの間に4段目は右斜め下がり・左斜め下がり・右斜め下がり・左斜め下がりの順に、5段目には連続する2箇所に、左斜め下がりの直線の切り込みが認められる。これがスカシの割付と関連のあるものなのか、あるいは文様意匠としてあるもののか判然とはしない。最下段を除く全段にはカキ目その後、粗雑な波状文が施される。



第4図 消滅古墳採集遺物実測図(3)

(6) 森屋5号墳 (第1図5)

先に記した1~4号墳からやや離れて位置する。「村誌」によると「古老の話では幼い時、石のほら穴があった」と記されている。現在ではその痕跡は確認できない。

(7) 森屋6号墳 (第1図6)

この6号墳に関しては4号墳と同様に不明確であったようである。

(8) 杯蓋採集地点 (第1図11)

先述した森屋古墳群からは約1.0km離れた地点で、千早川を挟んで別の丘陵に立地する。淨心寺山のみかん山開墾時に須恵器杯蓋が1点採集されている。

採集遺物 (第4図)

口径13.4cm・器高4.1cmを測る。天井部は丸みをもち、口縁へはそのままなだらかに至る。口縁部はなだらかにやや外側へ開いた様を呈するが、端部はやや内傾する。天井部と口縁部はなだらかにつながるため境界は明瞭でないが、やや凹線のようにくぼんだ状態を呈する箇所がある。天井部は回転ヘラケズリで、口縁部は回転ナデ調整で仕上げる。内面も回転ナデ調整である。砂粒からロクロの回転方向は時計回りと判断できる。

まとめ

以上、千早赤阪村北部で採集された古墳に伴うであろう須恵器について記した。これら採集資料の評価の方向性については、次の2つがあろう。1つは胎土を中心に考えうる生産、いわゆる窯の問題で、1つは時期的なことをクローズアップして周辺の古墳との関係を察する問題である。もちろん、採集資料であるのであくまでも評価の方向性としか言えないが。前者については、胎土や整形技法から検討すると、肉眼観察からは和泉陶邑窯に似る胎土・色調のものは無く、しいて言えば子持器台がそれにまだ近いようである^⑩。また、子持器台は中佐備窯の可能性も考えられなくはない。それを除く他の採集資料は各々よく類似しており、同じ供給元と推測できる。すなわち、これら採集資料については、付近の窯跡の存在を考えるのが妥当であろう。このことは、時代を異にするが森屋古墳群の北側に位置する神山遺跡出土の歪んだ須恵器の存在^⑪などからも保証されよう。以上のように、これらの資料は付近の窯跡の存在の可能性を改めて投げかけたと言える。後者は、周辺の古墳との問題である。これらの採集須恵器の時期は概ね脚付有蓋子持壺・台付壺・頸は中村編年II型式1・2段階を、子持器台はII型式3段階を、台付長頸壺はII型式5・6段階を、淨心寺山の杯蓋はII型式5段階を考えてよかろう。これらの資料の時期的な面を用い、周辺の古墳の評価を交えて若干検討すると、杯蓋を採集している淨心寺山を含め、千早川以東の丘陵には6世紀末頃と考えられている御旅所北古墳や金山古墳などがある。現時点ではこれらの他に千早川以東の丘陵には古墳が見当たらないことから、河南台地の一番南側、平地と丘陵の入り交じる最南端においては、千早川を境として時期的に遷地が行われていたと推測することが可能である。付け加えるなら、この地に古墳が築造されるピークは6世紀末頃である。もちろん、この見解は消滅した古墳のたった1点の採集資料を重視していたり、巨視的に論じていなかったりと問題のあることは否めないが、少なくとも現時点の成果から、千早川流域の古墳の築造が認められる最南端の地域では、千早川以東の丘陵に6世紀末頃に顯著に古墳が築造されはじめたという可能性を示唆することに問題はなかろう。また、付近にはこれらの古墳とは時期を異にするが、御旅所北古墳のすぐ東側に位置する御旅所遺跡、さらに北側には神山遺跡・別井遺跡と韓式系土器が出土している遺跡が約1.5kmごとのほぼ等間隔で位置し、加えて、金山古墳が渡来系の古墳であるとするならば、先に記した時期的な遷地というほかに、氏族的な面をも考慮の範囲とする必要があろう。いずれにしても、採集資料での言及には限界があり、可能性の域を抜け出ることはできず、今後の調査・研究の進展を待たなければならないことは論ずるまでもない。

謝辞

中村浩・三辻利一・栗田薰・赤井毅彦・西山昌孝・井原稔・岡山真美・菊井由起子の各氏には多くの御指導を賜りました。末筆ながら記して感謝します。また、日頃から何かとお手を煩わせている岩子苑子・谷口夫抄子のお二人には復元や実測図の作成などで、福田見之・夏子御夫婦・周藤光代氏にもこの文章を書くにあたって様々と大変お世話になりました。記して感謝します。

【註】

- (1) 中村浩氏の御教示による。
- (2) 上林史郎氏は下記文献のなかで、ひしゃげた須恵器から周辺に窯跡の存在が充分に考えられると記されている。

【参考文献】

- 尾谷雅彦 1996 「御旅所遺跡出土の韓式系土器」「韓式系土器研究VI」
- 上林史郎 1989 「近畿地域（1）－神山遺跡出土の初期須恵器－」「陶質土器の国際交流」
- 大谷女子大学資料館
- 千早赤阪村教育委員会 1983 「御旅所・御旅所北古墳調査報告書 千早赤阪村文化財調査報告書 第1冊」
- 千早赤阪村村史編さん委員会編 1980 「千早赤阪村誌」 千早赤阪村役場
- 富田林市教育委員会 1987 「中佐備須恵器窯跡発掘調査概要」 富田林市埋蔵文化財調査報告15
- 中村 浩 2001 「和泉陶邑窯跡出土須恵器の型式編年」 美容書房出版
- 堀田啓一 1997 「河内の双円墳について」『堅田直先生古希記念論文集』

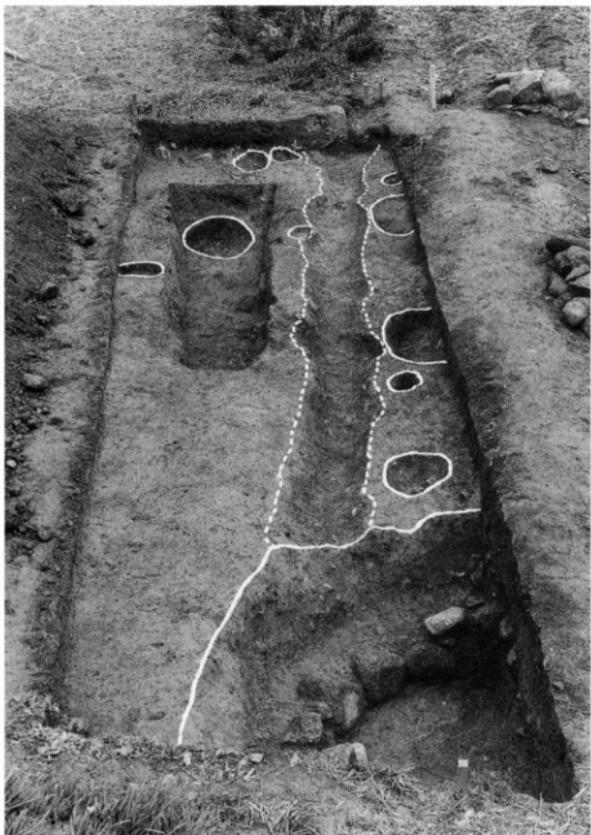
標図番号	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調
採集地点 図1-1	脚付有蓋子持壺	頸部 口径 12.6 口頸基部径 9.8 体部最大径 20.7 脚基部径 8.3 被部径 17.6 器高 37.0 体部高 18.0 脚高 11.0	やや密 4mm以下 の白・灰 色砂粒	良好	内面 N6/灰色 外面 N5/灰色
実測図 図2-1		子壺部 口径 5.8 口頸基部径 5.0 体部最大径 6.6 器高 37.0	2mm以下 の白・ 灰・黒色 砂粒混じる		
採集地点 図1-1	壺	口径 12.6 口頸基部径 6.9 体部最大径 10.4 器高 12.5 口頸部高 4.6 体部高 7.9	密	良好	内面 10Y7/1灰白色 外面 10Y7/2灰色
実測図 図2-2		口径 5.8 口頸基部径 4.8 体部最大径 12.4 器高 (残存高) 14.3 口頸部高 6.5 体部高 7.8	やや密 3mm以下 の黒色砂 粒混じる	やや良好	内外面ともに 5Y7/2灰白色
採集地点 図1-3	台付長頸壺	口径 5.8 口頸基部径 4.8 体部最大径 12.4 器高 (残存高) 14.3 口頸部高 6.5 体部高 7.8	やや密 3mm以下 の黒色砂 粒混じる	やや良好	内外面ともに 5Y7/2灰白色
実測図 図2-3		脚基部径 3.1 被部径 8.5 器高 (残存高) 12.6 脚部高 6.7	密 3mm以下 の白色砂 粒混じる	良好	内外面ともに 10Y7/1灰白色
採集地点 図1-3	台付壺	脚基部径 3.1 被部径 8.5 器高 (残存高) 12.6 脚部高 6.7	密 3mm以下 の白色砂 粒混じる	良好	内外面ともに 10Y7/1灰白色
実測図 図2-4		台部 口径 32.3 脚基部径 11.6 被部径 26.0 器高 43.1 台高 7.7 脚部高 31.5	密 2mm以下 の白・ 灰・茶色 の砂粒混 じる	良好	内外面ともに 5BG4/1暗青灰色 断面 10R5/4赤褐色
採集地点 図1-7	子持器台	杯部 口径 (中央) 9.7 口径 9.3 器高 (中央) 3.5 器高 3.8	密		
実測図 図3		台部 口径 32.3 脚基部径 11.6 被部径 26.0 器高 43.1 台高 7.7 脚部高 31.5			
採集地点 図1-11	杯蓋	口径 13.4 器高 4.1	やや密 3mm以下 の白色砂 粒混じる	やや良好	内外面ともに 5Y6/1灰色
実測図 図4					

表1 採集遺物法量表

図 版



調査区近景



調査区全景

SE01全景

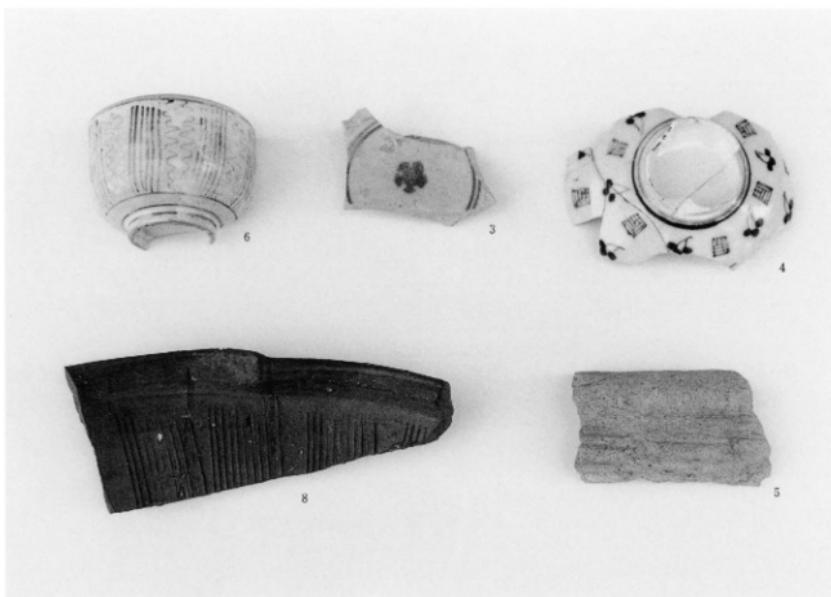


SE01土層堆積狀況

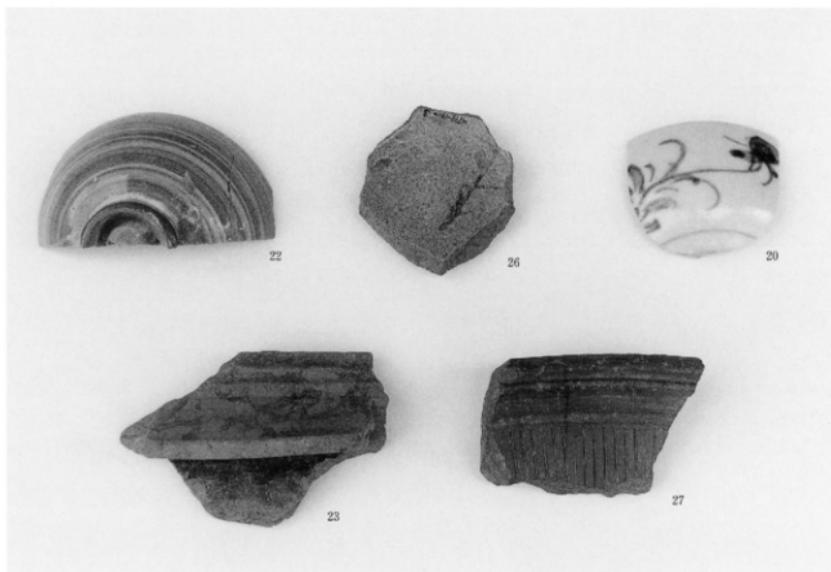


SE01遺物出土狀況





NT-99 S E01出土遺物 (P 9 の番号に対応)



NT-99 耕作土出土・周辺採集遺物 (P 10の番号に対応)

報告書抄録

ふりがな	たんじょうちいせきはくつちょうさがいよう							
書名	誕生地遺跡発掘調査概要							
副書名								
巻次数	Ⅲ							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集著者名	和泉大樹							
編集機関	千早赤阪村教育委員会							
所在地	〒585-0041 大阪府南河内郡千早赤阪村大字水分263番地							
発行年月日	西暦2001年 3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °.′.″	東経 °.′.″	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
なんこうたんじょうち 楠公誕生地 N T - 99	おおさかみみなみかわち 大阪府南河内 こまちほやあかさかわら 郡千早赤阪村 おおさかずいほん 大字水分	市町村 27383	遺跡番号	34° 27' 38"	135° 37' 15"	2000.01.11 ～ 2000.01.14	21.25	散策道整備
なんこうたんじょうち 楠公誕生地 N T - 00	おおさかみみなみかわち 大阪府南河内 こまちほやあかさかわら 郡千早赤阪村 おおさかずいほん 大字水分	市町村 27383	遺跡番号	34° 27' 38"	135° 37' 15"	2000.07.10 ～ 2000.07.31	135	公共下水道
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
楠公誕生地 N T - 99	城館	近世	柱穴 井戸	伊万里・唐津 瓦 ほか				
楠公誕生地 N T - 00	城館	中世		瓦器 瓦質土器 ほか				

誕生地遺跡発掘調査概要Ⅲ

2001年3月31日

発 行 千早赤阪村教育委員会
千早赤阪村大字水分263番地
0721-72-1300

印 刷 (株)中島弘文堂印刷所

